乱世の女 千宗恩

伊豆 肇

本名　渡辺　肇（わたなべはじめ）
大正6年　東京に生まれる
昭和15年　仙台予備士官学校卒
〃 20年　北支従軍　復員
〃 22年　東宝株式会社入社
現在　フリー俳優
著書　「風流交叉点」（昭和33～34年の間の
　　TV台本60本の中から15本収載）

乱世の女　千宗恩

定価　一三〇〇円

一九八一年三月一〇日　初版発行
一九八三年二月一日　四版発行

著者　伊豆肇
発行者　青木俊郎
印刷所　長苗印刷株式会社

発行所　株式会社　エイジ出版
一〇二　東京都千代田区飯田橋三ノ二ノ十二
山田ラインビル
電話（〇三）二六一一五七一八（代）
振替口座　東京八一二四六三四

©Hajime Izu, Printed in Japan, 1981

ISBN4-900225-07-X C0093 ¥1300E

乱世の女 千宗恩

伊豆肇

乱世の女 千宗恩　目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

川の流れ　7
丘のいただき　20
第一の男　37
男たちの中に　58
側室懐妊　76
第二の男　90
堺ずまい　104
第三の男　112
子育て　129
藤戸前後　141

本妻と妾 151
子の才能 167
幻の童子 172
十七歳の言い分 180
心よせの文 187
仲人の吉凶 227
女の陰謀 243
破局通過 266
あとがき 307

（装幀・伊藤重宏）

川の流れ

少女は洗濯をすますと、今度は、まるで幼児が水遊びに夢中なように、川辺の浮草をよけて水を掬った。川は佐保川である。

何度目かのとき、三角頭の、すこし目のとび出た小魚が手の中にあった。

「こわがらんでもええ、水はたんと手の中にある」

水はすこしずつ指間からもれた。

「水の中には火事がのうて、ええな」

水が半分ほどになると、魚は横になりはじめ、水がさらになくなると、白い腹を見せて跳ねた。

「人が焼け死ぬのも、こんなやろうか」

少女は三日前、川向こうの大仏殿のある、戒壇院が、一晩中燃えつづけたのを思っていた。
その大きな寺を、土地の人々は〝大寺さん〟と呼んでいた。少女はそこで遊び、そこで字を覚え、そこで育った。
その大寺さんのまわりが戦の場となり、戒壇院が焼けた。河内勢か山城勢か、あるいは近江あたりの武将の手下なのか、火をつけた者を殺してやりたかった。
魚は動かなくなっていた。少女は慌てて魚を流れにかえした。
少女の名は、りき、後の宗恩、その頃の家は、川の北にある佐保村の在、川中で、煤を練ってつくる墨を東大寺、眉間寺をはじめ奈良の寺々におさめていた。
りきが宗恩となるのは、三度目の夫、千利休の後妻になってからのことで、このずっと後の話である。
最初が武将松永久秀の側室、おりきの方。
二度目が堺の申楽師、宮尾三郎三入。
三度目が同じ堺の納屋衆、千与四郎宗易（利休）の後妻である。
最初の松永久秀との出会いは、この時の戒壇院の火事からである。
佐保村は、ほとんどが東大寺の寺領で、川中はその中でも、十三軒と戸数の多い在所であった。

川をはさんで南に大仏殿、北にこぶ二つあるなだらかな丘の佐保山、南の麓にある十三軒は、田も畑も、りきの家の墨づくりも、東大寺とのかかわりあいで生きてきた。

本家は山の登り口にあり、それに次ぐ二番目の代わり本家とよぶりきの家は、川に一番近い所にあった。そして山の頂には眉間寺が、寺というよりむしろ城構えの風で建っていた。

りきは水が好きだった。だから炊事、洗濯をはじめ水仕事はどんな寒い冬でも、苦にはならなかった。後に茶の湯に親しむのも、この水好きからである。

りきが大寺に、在の手不足で働きに出ると、坊さん達は、

「ほら、洗濯女」

と待ってたように、汚れ物を投げる。りきはそれが山のようになっても、天気さえよければ嬉々として、次から次へ仕上げていった。

ただ天気の悪い時は、投げてきてもすぐに投げかえし、

「この天気じゃあかんね」

と、それが役僧で、境内に働く人が恐れおおくて口もきけぬお人でも、投げかえした。

秋雨の一日、番僧が持ってきた紫の袈裟(けさ)をまとう高い身分の上人(しょうにん)の下着を、天気が悪いからと直接かえしに行き、上人が、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「天気がよい時で結構じゃから、洗っといてくれ」
と言うのを、
「その時に、あらためて出しなされ」
と置いて帰ったので、寺内では恐れを知らぬ洗濯女よと、すっかり有名になった。
りきは大寺に行くと、必ず大仏様に手を合わせた。
その大仏に火事騒ぎで、この三日会ってない。行こうとすると父に、
「物騒やで、大寺さんには当分行くな」
と言われ、母は、
「橋をわたったらいかんよ、先は地獄や」
とも言った。
橋は二尺板を二枚敷いた簡単なものだが、橋をわたれば少し南に下って、あとは東へ一本道、東大寺に通じる。
りきは川辺から腰をあげ、その橋のたもとに立つと、明日は大寺さんに行ってみようと家路についた。戻りながら道ばたの、まっ赤な小さな花をつけたみずひきを、
「ひとーつ、ふたーつ」

と、自分の齢の十四本ぬいた。

夕空には赤とんぼが群れていた。りきは急に手にしたみずひきをひとまとめにすると、

「ほれっ、大寺さんの火事見舞いや」

と群れに投げた。

眉間寺は、佐保山の中腹から、九十九段の石段になる。段の両側にはシャクナゲが植えられ、寺門の両側に、不動明王が剣を持って腰をおろしている。

庭内には石仏が幾つかあり、桜や紅葉樹の多い、いつもは静かな寺である。

本殿は茅ぶきで、大広間の奥に南へ向いて、東大寺からの阿弥陀如来の立像が祀られ、この大広間が佐保村の寄り合い場となっていた。

この寺が他と違うところは、まわりの石の塀が三間と高く、そして四隅に櫓(やぐら)があり、この上から四方が一段とよく見え、昔から城構えの寺に出来ていることだ。

広間では大火事いらい、連日寄り合いがもたれた。四日目になると、佐保村だけでなく、相楽(あいらく)や生駒(いこま)の方からも村人がやって来た。

りきは五日目、両親の目をかすめて橋を渡った。

橋を渡って東への一本道に入ると、正面に大寺さんの屋根が、杉の木越えに見え、いつもと変わらぬ姿だった。道は変わりはないのだが、どこか違っていた。

「そうだ、道が汚いんや」

りきは思わず声を出した。

ところどころに布切や、焼けた木片がちらばり、近づくにしたがって汚れはひどくなっていく。武者着の端しぎれや、焼けた経文の紙片がとびちり、食べ物のかすや、糞もたれ流してあった。

地獄の入口は、寺僧の屍から始まった。

うつ伏せに倒れた背に、衣はすっかり焼け、裸の赤くただれた肌に、蠅が黒くかたまってたかっていた。

りきの顔から血がひいた。手を合わせ、目をつぶったが、最初に見た死体が武者でなく、寺僧だったことで、りきには戦がどんなものか少し判ってきた。

あたりに濃く漂う死臭に鼻をおさえ、一歩々々注意ぶかく歩いた。そして次に見たのは、武者が二人、それも重なりあっている死体だった。

「お前たちが坊様を焼き殺したんやろ、死ぬのは当たり前や」

道は処々が血で黒くなり死人はふえる。しかし、りきは恐ろしいこと、惨めなことに負けたくな

かった。それに地獄は行き止まりでなく、その先が必ずあると信じていた。

風向きが変わり、紫の煙は死臭を運んでくる。

それでも、りきの気持を救ったのは、お寺さんの死者が、来がけの一体だけだったからであった。境内の武者や、さきがけの者の屍はいくらあっても、もうりきには石ころか、木の根と同じだった。死者には喜びも悲しみもない。人間とは縁が切れている物だった。

大仏は、首のあたりまで黒く焼け、体のそこここも今にも焼け崩れそうになっていた。

戒壇院の、大きな屋根が北の隅だけ残り、それが今にも倒れそうで、焦げた太い柱がやっと支えており、それが村の道から見えていた。

りきは大仏様を仰いで不満だった。

「大仏様は戦や火事を見とるのに、どうして助けてやりませんのか。毎日、手を合わせて拝んでおったのに。火が強かったらお首が落ちてたよ。首がなけりゃ死んでしまうんや。大仏様、しっかりしてえな、落ちたらもう石ころと同じや」

と呟いた。

突然、えたいの知れない大きな音が、遙か空の上から、りきの耳につきささるように落ちてきた。りきが顔を上げようとしても、竜巻のような激しさに目があけられない。りきは頭をかかえてうず

くまった。

真っ黒な風と、大きな音が一緒になり、りきを空に舞わせ、そして地にたたきつけた。

「母ちゃーん」

りきは夢中になって村への道を走った。

走った。走った。

川には橋がなかった。りきは思いきって跳んだが、川に落ちた。目の前を三角頭の魚が横切る。体は深みに落ちて行く。

「助けて、助けて……」

どこかに摑まろうとしても、摑まるところがない。

「助けてぇ」

明るい空が、手の届かぬ遠いところになり、やがて真暗になり底についた。

りきは大きな鳥の背にのっていた。

鳥はりきをのせると、赤と茶と紺の羽を拡げた。羽は大寺の伽藍をつつみ、尾を幾重にもまきあげ、尾の先は黄金色で、赤いトサカの前に出ていた。

足は長く、大仏さんさえひとまたぎにし、爪は刃のように光っていた。

鳥が一度はばたくと、山はみるみるうちに小さくなり、大空に出た。

空は七色の虹が重なり、それが幾つもの輪になり、輪はのびて線に変っていった。線が空いっぱいに広がり、輪と線が寄り合ったり離れたりして美しい色の網の目を、鳥は澄んだ声で唱いながら飛びぬけた。りきも快い風を頬に受けて共に唱った。

小さな家が見えた。

その家は、着いてみると、大きな幾層もある四角な白い石の家だった。頂は雲にかくれ、一つの面に百を越す部屋が、四面にあり、それが重なって空に消えていた。

七色の光の輪が、白い石の家を照らした。

その光に合わせて太鼓が鳴り、それに鼓が加わり、琴や琵琶が、やがて笙も加わり、水の音、風の音、山の音、鶯や雀までが一緒になって、石の家から聞こえてきた。

りきが鳥の背から下りると、光は消え音も途だえ、りきが部屋へ歩きだすと、光は再び輝き、音はりきの歩みに拍子を合わせた。

部屋はお祭りだった。

最初の部屋には頭のとがった、目の吊り上がった若い男たちが、早い拍子で体をくねらせて踊っており、次の部屋をのぞくと、白いあご髭を豊かにはやした翁が、赤と緑の二つの扇を手にしてゆ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com